

総義歯臨床 イメージを結果に繋げるラボワーク ～医療安全からの視点を踏まえて～

松丸悠一

その総義歯治療を成功させるにあたっては、全人的な高い技術が重要とされております。しかし、その一方で、ドグマ(独断的な説・主張・意見)が生じやすいといわれております。ここでわれわれ歯科医師・歯科技工士は客観性を欠く情報に振り回されやすい状況に注意し、その患者の健康と高い満足のために、術式に左右されない、ラボワークにおける診る目を養わなければいけません。

ではどのように診る目を養うか？それは正しいイメージを持つこと、そしてそのイメージと目の前のラボワークを常に照らし合わせ、検証する作業を怠らないことによって養われるのではないのでしょうか。

そして持つべきイメージ、ここで私達は方向を間違っただけではいけません。それは初診の患者さんが装着している旧義歯でもなければ、装着したばかりの新義歯でもなく、雑誌に載っている写真の義歯でも定かではありません。答えは口腔内で十分に機能している調整の終了した治療用義歯、本義歯にあります。

今回は医療安全からの視点を含めながら、治療用義歯を応用した臨床症例のラボワークを徹底して実際の口腔内と関連付け、その注意点をお話しさせていただきます。明日からの義歯製作に活かせる、結果と信頼に繋がるイメージを持っていただけるよう努力いたします。